

令和 2 年度
北大産婦人科同門会・W I N D
学術講演会

プログラム

日 時：令和 2 年12月 5 日(土) 午後 3 時より

会 場：札幌パークホテル

札幌市中央区南10条西 3 丁目 TEL 011-511-3131

北大産婦人科同門会
主 催 北大医学部産婦人科学教室
一般社団法人 W I N D

学術講演会「エメラルドA」3階 午後3時～5時

1)「教室一年の歩み」

北海道大学医学部産婦人科学教室

① 臨床統計

婦人科 病棟医長 遠 藤 大 介

産科 病棟医長 馬 詰 武

新生児 周産母子センター准教授 長 和 俊

生殖内分泌 産婦人科准教授 工 藤 正 尊

② 行事・会員動静

WIND 幹事長 金 野 陽 輔

③ 研究業績・学会・論文発表

婦人科助教 金 野 陽 輔

2) 新入会員紹介

WIND 幹事長 金 野 陽 輔

3) 特別講演

座長 北海道大学大学院医学研究院 産婦人科学教室

教 授 渡 利 英 道

「Doctors of Doctors」

熊本大学大学院生命科学研究部 産科婦人科学講座

教 授 片 渕 秀 隆 先生

「Doctors of Doctors」

熊本大学大学院生命科学研究部 産科婦人科学講座

教授 片 渕 秀 隆 先生

15世紀の北イタリアで病理解剖学すなわちマクロ病理学が誕生し、19世紀にはオーストリア・ウィーン学派の K.F. Rokitansky (1804-1878) とドイツ・ベルリンの R.L.K Virchow (1821-1902) によって病理解剖学が系統化された。その一方で、16世紀末にオランダで発明された顕微鏡は、ドイツの C.F. Zeiss (1816-1888) による技術革新によって、19世紀末には今日の光学顕微鏡に繋がる飛躍的な発展を遂げた。時を同じくして、ヘマトキシリンによる核染色、続いてエオジンとの重染色の考案、パラフィン包埋法の創出、ミクロトームの開発と薄切標本の作成、標本のホルマリン液固定と続き、顕微鏡で細胞を観察するミクロ病理学が確立するに至った。その中で、他の悪性腫瘍に先んじて、ドイツの病理学者であった C.A. Ruge (1846-1926) と婦人科医の J. Veit (1852-1917) の二人によって、子宮頸癌、子宮体癌それぞれの生検による組織診断が世に紹介され、外科病理学は婦人科癌によって夜明けを迎えた。その後、病理組織診断学は、先人の経験の積み重ねと弛まぬ努力によって、臨床における個々の症例の治療方針を決める確固たる地位を築いてきた。時空を経て2019年、21世紀とともに登場したがんゲノム医療の一環として、がん遺伝子パネル検査が導入されるに至り、リキッドバイオプシーや AI が診断の中に組み込まれるのも遠くない将来と予想されている。

1993年の夏、私は米国 Baltimore にある Johns Hopkins 大学の病理学教室で学ぶことが許された。広大な敷地の病院の一角を占める7階建ての焦げ茶色の Pathology Building、それがそのまま病理学教室であることに先ず度肝を抜かれた。そこには約60名の教員とほぼ同数の若い病理医が働いていた。そして、産婦人科の3年目のレジデントは数か月間をここで過ごし、彼らが準備して毎週行われる婦人科腫瘍の「Tumor Board」の最終判断は病理医が下していた。当時の「Tumor Board」は、病理の R.J. Kurman と婦人科の N. Rosenshein のツートップで行われており、世界1のカンファレンスであっただろう。生検標本の所見から手術なのか経過観察なのか、未婚女性の子宮を摘出するのか、卵巣は両側とも摘除するのか、放射線治療を追加するのか、化学療法を継続するのか。個々の症例の治療方針の根幹となるのは、最初にあって最後に至るまで間違いなく組織診断である。これこそが病理医が「Doctors of Doctors」と呼ばれる由縁である。

- 1) Kurman RJ, Ellenson LH, Ronnett B. Blaustein' Pathology of the Female Genital Tract. 7th ed. Springer 2019
- 2) 片渕秀隆. 婦人科腫瘍学のアカデミズム 考える臨床、科学的な病理から生まれるサイエンス. 日産婦誌 72, 1036-1054 2020
- 3) 片渕秀隆, 森谷卓也. 一冊でわかる婦人科腫瘍・疾患 周産期疾患, 生殖・内分泌疾患, 乳癌を含む. 文光堂 2017

略 歴

片 瀧 秀 隆

- 【学歴・職歴】 1982年 熊本大学医学部専門課程卒業
熊本大学医学部附属病院研修医（産科婦人科）
1988年 熊本大学大学院医学研究科博士課程卒業（第2病理学講座）、医学博士
1989年 熊本大学医学部附属病院助手（産科婦人科）
1993年 米国 Johns Hopkins 大学医学部研究員（病理学：R.J.Kurman 教授）（至1995年）
1997年 熊本大学医学部講師（産科婦人科学講座）
2003年 熊本大学医学部助教授（産科婦人科学講座）
2004年 熊本大学大学院医学薬学研究部教授（婦人科学分野）
2010年 （改組）熊本大学大学院生命科学研究部教授（産科婦人科学講座）
現在に至る
- 【資格】 日本産科婦人科学会専門医，日本婦人科腫瘍学会婦人科腫瘍専門医，日本がん治療認定医機構がん治療認定医，日本女性医学会女性ヘルスケア暫定指導医，熊本県母体保護法指定医師，死体解剖資格認定
- 【主な所属関連学会・学術団体】
日本婦人科腫瘍学会（理事長），日本臨床分子形態学会（理事長），日本癌治療学会（副理事長），日本婦人科がん検診学会（副理事長）JSAWI（日本女性疾患画像・病理診断学会，代表），日本胎盤学会（常務理事），日本産婦人科手術学会（理事），日本婦人科病理学会（理事），日本生殖免疫学会（理事），日本妊娠高血圧学会（理事），日本女性栄養・代謝学会（理事），日本エンドメトリオーシス学会（世話人），日本産科婦人科学会（代議員），日本癌学会（評議員），熊本産科婦人科学会（会長）等